

日本YMCA基本原則

私たち日本のYMCAは、
イエス・キリストにおいて示された
愛と奉仕の生き方に学びつつ
世界のYMCAとのつながりのなかで、
次の使命を担います。

私たちは、
すべての人びとが生涯をととして
全人的に成長することを願い、
すべてのいのちを
かけがえのないものとして守り育てます。

私たちは、
一人ひとりの人権を守り、
正義と公正を求め、
喜びを共にし痛みを分かちあう
社会をめざします。

私たちは、
アジア・太平洋地域の人びとへの
歴史的責任を認識しつつ、
世界の人びとと共に
平和の実現に努めます。

2016年6月1日発行 (毎月1日発行)
1947年10月27日 第三種郵便物認可
本体価格45円(外税) (送料62円)
発行/公益財団法人 日本YMCA同盟
〒160-0003 東京都新宿区本増町7
TEL: 03-5367-6640 FAX: 03-5367-6641
URL: <http://www.ymcajapan.org/>
発行人/島田 茂 編集人/山根 一毅
印刷/あかつき印刷株式会社

「居場所」が持つ力

在日外国人教育生活相談センター・信愛塾
センター長
竹川 真理子



信愛塾は1978年、在日大韓基督教会横浜教会と横浜の民族差別と闘う会の支援のもとに、在日韓国・朝鮮人の子ども会として生まれました。ここで在日外国人と日本人が出会い、交流し、支え合い、2004年11月には、在日外国人との共生社会の実現に寄与することを目的としたNPO法人の設立に至りました。現在は、在日外国人の教育・生活相談、在日外国人の子どもたちを中心とした子ども会、学力保障の場としての補習クラス、母語クラス、日本語クラスなど、さまざまな活動を行っています。

信愛塾は「居場所」ではあるけれど、なぜ子どもたちはここに集まるのかと最近よく考えます。先日、卒業を祝う会を行った時、子どもたちは信愛塾の楽しさについて語ってくれました。怒鳴ったり、笑ったり、母語で話したりしたこと。時には厳しく叱られているはずが、じゃれ合っているようでもあったこと……「それって家族と同じじゃん」と誰かが言いました。自分の心の中にある母国の言葉と文化、民族としてのアイデンティティや歴史認識、家族のことなど、日本にいと大っぴらにできない、自分の中にある「何か」をさらけ出せることが信愛塾の魅力なのかも知れません。学校や家庭ではないけれど心を開ける場、つまり、自己を確認できる「居場所」となっているのだと思います。

もう一つの魅力はOB・OGの持つ、いわば「先輩力」とでもいうような不思議な力です。自分たちと同じように、学年の途中から日本にやって来て、言語はもとより文化や教育制度まで分からないまま

苦勞を重ねてきた先輩たちは、困った時にはいつでも相談に乗ってくれ、勉強はもちろんゲームやスポーツにも付き合ってくれます。自分と同じ体験を通して先輩を見ていると、自分もいつかは先輩のようになれるという、身近な未来を描けるようになるのです。

ある時、一人の青年が信愛塾の前にたたずみ、中をうかがっていました。「タケちゃん先生、俺のこと覚えてる?」。中学生のころ、やんちゃを繰り返していたK君。今では一児のパパとなっていました。「俺もいろいろやってきたんで、今、かわいそうな子の面倒見てるんだよ」「面倒って?」「勉強教えたりしてるんだ。俺がじゃなくて、奥さんが。俺の奥さんは大学出てんだよ」。かつて荒れていたころの面影はすっかり消え、新たな責任感すら感じられます。人との出会いとつながりの中で大きく成長したK君は、その姿を見せに来てくれたのです。

「あのころは何を言われても耳に入らなかったんだ」と、K君は当時を振り返りますが、それでも信愛塾には来ていました。昔も今も、子どもたちが変わらずに求めているのは、学校と家庭から一歩離れた別の関係がある「居場所」なのだと思います。

子どもたちは本当にたくましい、内在する力を秘めています。子どもたちの笑顔や悲しみには、私たちが共に生きる社会をつくるヒントが隠されています。共に生きる社会をつくるには、私こそ、私たちこそ、変わっていかねばならないのではないのでしょうか。

ラポール

相手と向き合って
心を合わせていくこと。
(仏語: 信頼・共感的関係の意)

傍らに立つ

「もっとも重要な掟は何か」との問いに対して、イエスの答えは2つでした。「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして神を愛すること」と「隣人を自分のように愛すること」です。聖書全体はこの2つの掟を土台としていると、イエスは言われました。神を愛するだけでは足りないのです。人を愛することがなければ、神の掟を守ることにはなりません。縦の関係と横の関係の両方がなければ、十字架は完成しないのです。

イエスはここで、隣人を「自分のように」愛しなさい、と言います。難しいことです。自分の家族なら、それこそ「自分のことのように」心配するでしょう。でも特別に関係があるわけではない「隣人」にそこまでの思いを持つことができるでしょうか。そんなことは、きっと誰にもできないと思います。

それを認めた上で、苦しんでいる誰かの傍らに立とうとすることはできるかも知れません。イエスはいつもそのようにして、人びとと出会われたのではなかったでしょうか。

聖書には、イエスはしばしば、苦しみを負う人びとと出会って「憐れんだ」と記されています。

「憐れむ」という言葉は「はらわた」を意味する単語から来ています。「はらわた」で隣人の痛みを知られたということです。それは別の言い方をすれば「共感しようとする」ということになるでしょう。そういえば、本欄のタイトルになっている「ラポール」も「心を通わせ合う」という意味なのだそう。

「隣」という字の「阝」は、場所を表す部首ですが、それを心を表す「忄」に変えると「憐れみ」になります。痛む人の隣に、その心の傍らに立とうとすることから「愛する」ことが始まるのではないかと私は思います。私たちの周囲には、さまざまなしんどい思いを抱える人びとがいます。子どもたちの中に、若者たちの中に、高齢者の中に、外国人やさまざまな少数者の中に、重荷を負い、心に傷を負い、孤独と不安の中にある人がたくさんいます。YMCAがまずなすべきことは、そのような一人ひとりの傍らに立とうとすることではないのでしょうか。そこから、私たちのなすべきことが見えてくるはずです。きっとそれこそが、神の掟を守る第一歩なのだと思います。

日本基督教団
神戸聖堂教会牧師
小栗 献

放課後から子ども

未来が生まれる



YMCAのアフタースクール

みんなでつって、みんなで楽しむ、お祭りづくりの放課後

北見YMCAアフタースクール

北海道YMCAスタッフ 鹿中 由美

北見YMCAにアフタースクールが開設されたのは、今から26年前。チャイルドケアセンターとして始まったJoy保育園の卒園児と地域の子どもの放課後の受け皿としてスタートしました。以来、子どもたちの居場所、社会体験やさまざまな実習(習いごと)を楽しく学ぶ場を提供することで、「精神・知性・身体」のバランスの取れた成長を目指す活動を日々行っています。

月～土曜日の受け入れ、4つの習いごと(英語、水泳、パソコンと、体育・エアロビクス・サッカーから1つを選択)に加えて、子どもたちを小学校からYMCAへ、帰日も自宅へとワゴン車による送迎を行っている。働く保護者にとってもYMCAは「安心・安全な第2の家庭」となっています。

毎年7月初旬には、「キッズ祭り」を行います。実行委員に手を挙げた15人ほどの子どもたちが、ゲームやお化け屋敷の内容を考えたり、看板や道具の準備をしたり、1カ月前からさまざまな準備に取り掛かります。同時にそのころから、子どもたちは「発表」の練習

を始めます。毎年、子どもたちは大勢でできて、楽しいものをみんなで作ります。昨年は、プラスチックカップと手を使ってリズムカルに音を鳴らす「カップス」に決めました。当日の発表の後は、保護者の皆さんにも参加してもらい、総勢170人で一緒にリズムを刻みました。

一人ひとりが自分の音を出しながら、みんなと一緒にリズムを刻む「カップス」は、まさに私たちのアフタースクールそのもののようなものでした。



キッズ祭り、みんなで「カップス」に挑戦!

幼稚園の子どもやお母さんと過ごす放課後

Challengedプログラム「ぼっぶご〜ん」

とちぎYMCAスタッフ 坂本 ちえ子

「ぼっぶご〜ん」は、「神様からチャレンジすべき課題や才能をあたえられた」発達障がいの子どもの活動です。その中で、幼児から中高生世代の子どもたちを対象とした通常の活動が「デイぼっぶご〜ん」。YMCAが運営する「さくらんぼ幼稚園」の園・卒園児や、その保護者と共に放課後を過ごします。

「デイぼっぶご〜ん」では最近、幼稚園の預かり保育やネイチャープログラムと一緒に活動もしています。幼児たちの中には、自分より大きい人がピョンピョン跳ねる姿に、初めは戸惑いや不思議そうなるまなざしを送る子もいますが、活動を共にすることにより、幼い視点で彼らを受け入れるようになる様子が見え始めます。幼児が苦手だった「ぼっぶご〜ん」メンバーも、「さくらんぼ幼稚園」の幼児たちと触れ合ううちに、徐々にその存在を受け入れるようになっていきます。

保護者との会話の中で、散髪の大変さが話題になったことがありました。美容室に行くのが駄目なら来てい

だこうということになり、福祉活動をされている美容室の経営者をお願いしたところ、年に数回、美容師さんたちが来てくださるようになり、体験したメンバーのほとんどは、町の美容室でのカットが可能になりました。

ある日、高校卒業を間近にした子が「僕は4月から仕事をします。」「ぼっぶご〜ん」は今日で終わりです。今度は「アイスファイヤー」になります」と、新たな環境への意欲を伝えてくれました。彼は、小学校3年生からのメンバーで、4月からは青年を対象にした活動に参加します。

多くの皆さまのご理解とご支援をいただきながら、子どもたちは今日も「ぼっぶご〜ん」のように楽しくはじけています。



美容師さんのカットを体験するプログラム「ケージクラスカット」

相手を知って理解する、国際理解の放課後

金沢八景YMCA学童クラブ

横浜YMCAスタッフ 渋谷 萌子

仲良くなるためのはじめの一歩、それは相手を知る事です。その相手が個人単位でも国単位でも同じです。自分や自国との違いを知る、他者や他国の良さを「知る」ことが、国際理解・多文化共生への道を開きます。金沢八景YMCA学童クラブでは、年間を通じて国際理解プログラムを実施しています。国際理解・多文化共生の基盤は平和教育。違いを認め、他者を尊重する心を養うことが、このプログラムの趣旨です。

2015年度もさまざまな角度から国際理解を深めましたが、目玉として実施したのは「ワールドフードチャリティフェスタ」でした。子どもたちは日替わりで異なる国の料理を作り(韓国:チヂミ、スペイン:パエリアなど)、リーダーや保護者に販売しました。世界の食文化を身近に感じること、売り上げを横浜YMCA国際・地域協力募金にすることを目的としたこのイベントは、世界の料理とレシピを調べるところから始まりました。子どもたちは、調理工程はもちろんのこと、店番やお金の管理、宣伝ポスターの作成、販売方法の提案など、それぞれが

自分でできることを考え、主体的に取り組みました。

「教えてもらう」のではなく、自らが「知る→気づく→行動する」というプロセスを経験することで、子どもたちの「もっと知りたい!」「こんなことしてみたらどうだろう?」という知的好奇心は高まります。国際理解・多文化共生に向けた活動に、一人ひとりが主体的かつ能動的に取り組めるような「きっかけづくり」を準備しながら、私たち指導員は今後も子どもの成長をサポートしていきたいと思っています。



手づくりのホットドッグとホットココアを販売して、国際・地域協力募金に貢献!

お父さん・お母さんの「ここがうれしい!」

子どもがYMCAのアフタースクールに通って「ここがうれしい!」を、3人のお父さん・お母さんに教えてもらいました。

増えていく「自分でできる」を見守るのがうれしい!

北九州YMCA/門司青育Y・児童クラブ 遠山 仁美さん

莉央と友梨は、入学前からお兄ちゃんのお迎えついでに学童という場に連れていたので、学校にも戸惑うことなく通っています。上級生のお兄さん、お姉さんがよく遊んでくれて、友達もたくさんできました。人見知りだったけれど、他校の学童や地域の方との交流、高齢者施設の訪問などでたくさんの人と触れ合い、いろいろな体験をして、自分でできることが増えてきました。おやつや食事づくりは、家でもやっていたがうになりました。以前は私もすぐに手助けしていたけれど、今では見守ることができるようになりました。



友梨ちゃん(小1・中央)と莉央ちゃん(小3・右)

保護者の皆さんとの交流がうれしい!

YMCAせとうち/うのクラブ 立川 透さん

今年、中学生になった長男の慎が「うのクラブ」に通うようになったのは小学1年の時。地元出身でないため友達もおらず、初めて迎えに行った時はリーダーと二人でいましたが、時間の経過と共に友達も増え、上級生にはかわいがられ、「行くのが楽しみ!」と聞いた時は安心しました。

3年生になり、「うのクラブ」のファミリーキャンプに参加したことが、わが家の転機になりました。24時間の共同生活……保護者の皆さんと楽しく交流する中で、息子の友達のこと、わが子を見るのと同じ目線で見るようになっていました。今後父親として、他のお父さん方といういろいろなイベントに協力していきたいと思っています。



小学生のころの慎君

帰って来る場所があるのがうれしい!

茨城YMCA/わいわい児童クラブ 杉本 久美子さん

我が家の長男は布達といい、私たち夫婦が青年海外協力隊員として働いていたハンガリーの首都ブダペストにちなんで名づけられました。息子は小学2年生からYMCAの児童クラブに通い始め、目の前にある公園で野球をしたりと楽しい日々を送っていましたが、小学校3年生秋に父親の転勤でウズベキスタンのインターナショナルスクールに転校することとなりました。3年間の滞在中、毎夏帰って来てはYMCAキャンプに参加するのを楽しみにしていた布達も、この秋には軽井沢で高校1年生として新たなスタートを切ることになりました。私たち家族は年明けにチュニジアへと家族で向かいますが、またYMCAに帰って来たいと思います。



現在の布達君(右)と妹の文月ちゃん(中央)

YMCAは全国50以上の場所で、放課後の子どもたちの「生活の場、学びの場」を提供しています。子どもたちが受け入れられ、守られているYMCAのアフタースクールは、家族も安心できる場所です。

放課後の子どもたちは、国際・平和教育活動、自然体験、キャンプなどを通して、仲間と喜びや悲しみを分かち合い、「共に生きる」毎日を過ごします。

驚きと発見の日々は、子どもたちの未来へと向かいます。

子どもたちの未来は、家族の、地域の未来。そして私たちの未来です。

2016年春にスタート!

森の中の放課後 「森のアフタースクール」

YMCAせとうちスタッフ 美時 智子(姫路YMCAアフタースクール応援)

太子町立太田小学校の学童保育に集う子どもが定員を超えそうになった時、太子町と協議の上、YMCAのアフタースクールを立ち上げることになりました。そして2016年春、姫路YMCA「森のアフタースクール」が神戸YMCA・YMCAせとうちのサポートを受けて開設されました。

姫路YMCAの太子キャンプ場を遊び場とするアフタース

ールの16人の子どもたちは、「感じる」というアプローチで自然と出会い、その不思議を楽しんでいます。「これ、なんや!」と発見したのは、鹿の毛や糞。「キャンプ場には鹿が住んでるん!」と大興奮し、「会いたい!」と夢をふくらませています。モグラの死骸を見つけ、「死んだの? どうして?」と生と死を考えたことも。また、「水はどこから来るの?」という疑問から、水源探しの探検に出発したり、「ここ眺め最高!」と秘密基地作りも始まっています。

初めて森に行った時、「何もいないやん」「キャンプ場がゲームセンターやったらいいのに」と言っていた子どもたちが、今では「今日は、キャンプ場の日?」が挨拶代わりになっています。多様な生き物に導かれて自然の不思議と命に触れ、大好きになった太子の森。この豊かな森の中で、子どもたちは何を発見し、考え、育っていくのでしょうか。子(個)育ちのために私たちができることを、これからも考え続けていきます。



森の中に見つけた「私の場所」

Vol.17

We All Belong to YMCA

YMCAの活動に参画するユースからの発信

◆奈良YMCA 野外活動クラブ「トムソーヤ」「ロビンソン」 ◆内容:「トムソーヤ」は小学1~3年生、「ロビンソン」は小学1~6年生を対象に月1回行う活動。野外料理やクラフト、ウォークラリーなどを少人数のグループで体験する。



左端が佐々木さん

私は、奈良YMCAで月1回の野外活動やシーズンキャンプを通してさまざまな子どもたちに出会ってきました。野外活動では1年間という長い期間を通し、またキャンプでは短い期間で子どもたちの頑張る姿や成長を見ることに、リーダーとしてのやり甲斐を感じています。

経験を積んでいくうちに「子どもと共に成長するリーダー」という目標を見つけることができたのも、私にとってYMCAで得た大きな糧となっています。子どもたちに「挨拶をきちんとしようね!」「ごめんなさいって言うかな?」「片付けは自分でするんだよ」と教える中で、逆に普段自分ではできていたのかな?と考えさせられることがたくさんあります。「子は親の鏡」と言いますが、「子はリーダーの鏡」とも言えると思います。活動中、うまく取り組みができていない子どもや、悩んでいる子どもがいれば、それは自分がその子に対してきちんとサポートできていない証拠なんだと、子どもの姿から学ぶばかりです。

親でもない、学校の先生でもない、YMCAのリーダーだからこそできる子どもとの関わり方をこれからも探求していきたいと思っています。佐々木 直信(フィンリーダー)

全国の想いをつないで熊本へ

熊本地震発生から続く、YMCA支援活動

4月14日から熊本県で発生しているマグニチュード7.3を含む連続地震は1,400回を超えました。避難生活のさなかに亡くなった20人を含めて死者は69人、避難生活者は10,305人、住宅被害は85,506棟にも上ります(5月17日現在)。

県内に14拠点有する熊本YMCAは、地震発生直後から、自ら被災しながら

も支援活動を開始しました。指定管理者として運営する「益城総合運動公園・体育館」および「御船町スポーツセンター」は、避難所として1,400人の人びとを受け入れています。また、「阿蘇YMCA災害ボランティアセンター」も開設しました。

熊本YMCAはこれまで培ってきた経験を生かし、地元の行政、全国のYMCA・ワイズメンズクラブや諸団体との協働による復興支援活動を進めています。

熊本地震募金にご協力ください

日本YMCA同盟ホームページのサイト内でも受け付けています。
<https://srv.asp-bridge.net/yymca/index/>

<p>①「熊本地震・YMCA救援・復興募金」 地域コミュニティ復興を前提とした募金全般(避難所運営・コーディネーター派遣、活動運営費等)</p>	<p>②「熊本地震・被災YMCA支援募金」 被災YMCAの再建・運営支援を目的とした募金全般</p>
<p>■三菱東京UFJ銀行 四谷支店 普通 0111494 公益財団法人日本YMCA同盟 青少年救援復興募金口</p>	<p>■三菱東京UFJ銀行 四谷支店 普通 0111481 公益財団法人日本YMCA同盟 被災YMCA支援募金口</p>
<p>■郵便振替口座 00130-4-696497 日本YMCA同盟災害支援募金口 *通信欄に「①募金」または「②募金」とお書きください</p>	



続く大きな余震、長引く避難生活のなかで -熊本YMCA・支援の現場から

地震発生から1カ月が過ぎ、熊本YMCAでは県内14箇所の各拠点で地震の被害を受け、約半数の職員が自らも被災しつつ、各地で懸命に支援活動にあたっています。

YMCAでは、古くは伊勢湾台風から阪神・淡路大震災、中越沖地震、東日本大震災等の国内の地震・災害、スマトラ島やレイテ島等での大規模災害など、支援活動を行ってきました。ここ、熊本YMCAにおいても、水俣豪雨災害のボランティア派遣、近年では阿蘇の水害支援など、常に地域に寄り添いながら活動を行ってきました。

これらの経験をすべて結集し、現在、避難所運営、子どもと高齢者のケア、ボランティアセンター運営など、県内各地で展開しています。

今なお、大きな余震が続き、梅雨による土砂災害に心配が及びます。夏には台風もきつときます。雨風を直接感じない安心して暮らすことの

できる場所が必要です。避難所の環境整備も個人の空間をいかに作っていくのか、学校が始まっていく中で子どもたちの学習環境はどう確保できるのか。介護が必要な方の生活支援、地震の影響で心的な影響を受けた方の支援はどうするのか。私たちのなすべきことはたくさんあります。

これから、本当の被災地支援だと思っています。いかに持続可能な支援活動を行っていくのか、どうやってその体制を整えていくのか、YMCAの底力が問われています。震災後、日本のYMCAから、300人を超える職員、ユースを派遣いただきました。全国各地から温かい励ましをいただき、募金活動やチャリティイベントに勇気をいただいています。ぜひ、この困難を共に連帯し、乗り越えていきたいです。

神保 勝己(熊本YMCA災害対策本部)

被災者に寄り添うYMCAの支援活動

避難所で高齢者ケアプログラムを実施



高齢者の心身をほぐすプログラムを行っている。大阪YMCAから駆け付けたスタッフを囲んで

避難所でチャイルドケアプログラムを実施



'World Vision Japan'とも協働して、子どもの遊びプログラムを行っている

避難所に生まれたカフェで小中学生も活躍



横浜YMCAが中心となってカフェを開店。避難所の小中学生ボランティア「カフェ隊」もコーヒーをサービスしている

「阿蘇YMCAボランティアセンター」を開設



4月26日に開設されたボランティアセンターでは、ボランティアを受け入れ、地域復興のために活動を続けている

企業とYMCAが連携して速やかに物資を配送



物資の箱には「ぼくと同じアレルギーの子どもも食べ物が口にとどいていきますように。おうえんしています」の言葉

全国での街頭募金と海外からのメッセージ



地震発生の直後から、各地で募金の呼び掛けが始まった。海外のYMCAでも(タイ・チェンマイYMCA)